

## 東京芸術祭ワールドコンペティション回想

フォー サミエル (演劇家)

2019年10月29日から11月4日に開催された東京芸術祭ワールドコンペティションに批評家審査員として参加させていただいたことを大変光栄に思います。一週間にわたり、世界中からの役者、演出家、ダンサー、歌手、学者、審査員らとともに、さまざまなパフォーマンスを見せていただき、個々のパフォーマンスについて討論したり、批評してきました。この芸術祭は、私にとって2030年に向かうパフォーマンスの未来を予見させてくれるものとなりました。

私が審査を行ったのは、ブキナファソ、チリ、スペイン、中国、オーストラリア、日本の6つのパフォーマンスでしたが、芸術祭実行委員会の方から、本コンペティションはパフォーマンスの優劣を決めるものではないと事前に説明を受けていました。これに関しては、参加者たちもが賛同を示していました。「東京芸術祭ワールドコンペティション」の「コンペティション」とは、熱い思いをもった者たちがそれぞれのパフォーマンスを披露し、お互い議論し合う場である、という意味で用いられているのだと私は理解しております。こうしたスタンスは、良質の芸術が常に批評の対照となるものであることを思いさせます。芸術家たちは常に独創的に思考し、自らの芸術をよりよいものにするために日々努力をし続けていますから、このような場が芸術家たちに与えられることは大変意義深いことでもあります。

今年度のコンペティションで表彰されたアーティストたちもまた、他の参加者たちが来年に向けて彼らのパフォーマンスに磨きをかけ続けていくことを分かっていることでしょう。この芸術祭で偶然にも居合わせたアーティストたちは互いに良きライバルとなることは間違いありません。

さて、ここで6つの演目について簡単に解説してみます。スペインから参加したエル・コンデ・デ・トレフィエルの演目 *Possibilities that Disappear before Landscape* ではマイムを大いに楽しみました。役者の芸術的な大胆さのなかに演劇的な表現力を感じました。キラキラした道具や色とりどりの舞台デザインが全体に統一感をもたらし、マイムのメッセージ性をうまく引き出していたと言えるでしょう。ステージ上での動きもたいへんよく計算されており、その対称性や役者のバランス感性をこちらに意識させるものになっていました。ステージ上のトポグラフィや空間の組み立ては観る側を十分に楽しませてくれました。

ブキナファソ生まれの役者で演劇家のシャルル・ノムウェンデ・ティアンドルベオゴは、彼のソロパフォーマンス *Mea Culpa* で観衆を虜にしました。彼の熱意に満ちたパフォーマンスの中でも、その敏捷性はとくに際立っており、素晴らしいステージが創り出されていました。派手な衣装や照明、カラフルな舞台セットにも関わらず、身体動作や顔の表情をより意識させる演出に、グロトフスキの「貧しい演劇」のテクニックの採用をみました。その作品はダンス、音楽、歌、マイム、仮装、魔法からなる壮大な総合演劇となっていました。また、役者と観衆の関係がうまく作り上げられていた点も特

筆されるべきでしょう。観客に椅子の端に座るように促したり、観る側をうまくパフォーマンスに参加させる技術が巧みで、インタラクティブな劇場空間が完成されていました。アフリカ社会の腐敗、独裁、権力者という題材を扱っていましたが、これらの深刻な社会的・政治的問題を映し出す鏡として演劇を使うのではなく、さらに踏み込んだ、いわば楔をさすといった役割を演劇に担わせてみる—いわばブレヒトの典型的なやり方で—という彼の挑戦を理解することができました。

チリのサンチアゴからやってきた演劇カンパニーBonoboは*You Shall Love*を演じました。シンプルな舞台セットにアップビートなパフォーマンスという組み合わせに、人種差別、他者の集合のなかでの包括という深刻な問題を扱いました。演者たちの口から繰り出されるセリフにスペイン語のメロディのような心地よさを感じましたが、同時に、彼らの記憶力やセリフ回しの上手さにも圧倒されました。

大阪から参加した演劇カンパニーDracomの演目*Sonokaizu*では、コテコテの関西弁がハーモニーのように感じられた。繰り出される言葉は役者の心の底から聞こえてくるようでした。言葉のリズム、調子、テンポは彼らのパフォーマンスの美しさを十分に際立させていました。痛み、孤独感、無関心というハードな主題が扱われていましたが、観客たちは彼らの言葉の柔らかな響きに誘われるようにして、次第に厳しい現状に目を向けさせられているような感覚になったことでしょう。

中国のDai Chenlianカンパニーによる人形劇*Big Nothing*では、一人の役者の洗練された魔術によって、観衆は現実と幻想が目の前で横断しているような感覚に捕らわれていました。しまいには、会場全体がうっとりとした雰囲気になりました。とりわけ、鳥を使ってのドラマチックなエンディングは忘れることができません。

オーストラリアのシドニーチェンバーオペラが演じた*Howling Girls*では、歌手の素晴らしい歌唱力に心をつかまれました。独創的な楽器、珍しい衣装、厚みのある音響は多くの人を虜にし、芸術祭のなかでもとくに大きな反響を得たパフォーマンスとなりました。

東京芸術祭ワールドコンペティション 2019の壮大な閉会セレモニーは、東京都知事、豊島区長、大使館関係者、当芸術祭関係者、国内外の演劇関係者の皆さんによる素晴らしいスピーチを交え、無事に幕を閉じました。

本芸術祭は実行委員会や技術的なサポートをされてきた人々、そしてもちろんプロフェッショナルリズムに徹した本芸術祭ディレクターの努力の賜物です。彼らの涙ぐましい努力なしには、このような大成功をもって本芸術祭を閉じることはできなかったでしょう。緊張が続いた一週間でしたが、その後に開催されたカクテルパーティーはリラックスした雰囲気のもと、とても楽しい場となり、そこでもいろんな人びととの交流を楽しむことができました。協力いただいた同時通訳の方がたも、参加者たちが心おきなくフレンドリーに交流できるようにたいへん気を配っていらっしゃいました。

本芸術祭の審査委員の一人として、また演劇に関わるものとして、私が切に願うのは、「真の芸術」は政治、教訓、道徳とは無関係といった19世紀的なスローガン、つまり「芸術のための芸術」を実践するというものであってはいけないということです。

「芸術のための芸術」という概念については多くの人びとによって議論され、そこから新しい提言が出てきました。たとえば反植民地主義で知られる高名な作家チヌア・アチェベは「芸術は人間の基本的な欲求であり、地に足のついたものでなければならない」

と明言しています。こうした未来へ向かう素晴らしい提言に喚起されながら、演劇関係者たちは扱う主題を入念に考慮し、私たちが生きるコミュニティや社会における苦悩や社会的困難について芸術がどのように創造的に関わることができるのか、どう表現できるかと考え続けていく必要があります。演劇関係者は自分が置かれた社会の洞察者となり、良き理解者となって声なき人びとや被抑圧者たちの声となる必要があります。

現在、国際連合が「誰一人取り残さない」というスローガンで、ジェンダーの平等、平和と公正を促進する機関、気候変動、持続可能な都市やコミュニティについての問題に積極的に取り組んでいます。われわれ芸術家たちも芸術的なやり方でこの取り組みに関与していこうではありませんか。さあ、前に進んでいきましょう。

そのために、まずは2030年に向かって、パフォーマンスアーツをさらに盛り上げていきましょう。芸術的表現力をさらに磨きましょう。また、国籍や専門分野などを超えて、さまざまな背景をもつアーティストたちがともに協力しあい活動していく、相互に関わり合い続けることも大事です。そして何よりも、多文化的な環境で楽しみながら学び、作品を多く生み出すことがますます大切になっていくことでしょう。

それでは、次の東京芸術祭ワールドコンペティション2020でお会いしましょう！